

氏名	石橋 鼓太郎
ヨミガナ	イシバシ コタロウ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博国2号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	制約を創造に変えるアートマネジメント ——<野村誠 千住だじゃれ音楽祭>のエスノグラフィ——

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科）	熊倉 純子
（副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科）	毛利 嘉孝
（副査）	東京藝術大学	准教授	（国際芸術創造研究科）	箕口 一美
（副査）	東京大学	教授	（大学院情報学環）	福島 真人
（副査）	九州大学	准教授	（芸術工学研究院）	中村 美亜

（論文内容の要旨）

本論文は、現代日本における市民参加型の音楽実践〈野村誠 千住だじゃれ音楽祭〉のエスノグラフィを通じて、作曲家・アマチュア・文化政策のあいだに生じる様々な葛藤とそれを乗り越えるための試行錯誤が、既存の前衛音楽・実験音楽・コミュニティ音楽における問題点を乗り越える可能性を秘めていることを論じたものである。

まず、序章で本事例において見られた特徴的な場面について概観した後、第1章でその歴史的・理論的位置づけについて整理した。歴史的には、専門家が非専門家と積極的に関わろうとする音楽実践の系譜をたどり、前衛音楽・実験音楽・コミュニティ音楽において、専門家・非専門家・制度という3つのアクターのいずれかを重視あるいは軽視しすぎること、実践が硬直する問題が生じていた。次に、これを以下の3つの理論的問題として整理した。1つ目は、音楽学が対象としてきた作曲家におけるプロセスと結果の問題、2つ目は、社会学が対象としてきたコミュニティにおける個と集団の問題、そして3つ目が、文化政策研究が対象としてきた文化政策における現場の創造性とアカウンタビリティの問題である。そして、これらの問題における2つの項をどちらにも還元せず両義的なものとして捉えるために、「偶然性」、「逸脱」、「つながり」という3つの概念に着目することを提案した。さらにこれらの問題は、テオドール・アドルノにおける「自然支配」の問題として整理できた。アドルノは、ある主体が対象を支配下に置くことも、主体から対象を切り離すことも批判し、「自然支配による自然支配の撤回」、あるいは「支配する主体が支配される対象によって制約されることで起こる創造」という契機に着目した。最後にこのような視点をアートマネジメント研究へと拡張し、芸術か社会かという区別を問わず、ある対象を管理・支配することと創造との関係を扱う新たな研究アプローチを提示した。

第2章では、本事例のディレクターである作曲家の野村誠に焦点を当て、その作曲活動におけるプロセスと結果の関係を、偶然性という観点から明らかにした。偶然性の音楽においては、結果としての音楽作品よりもプロセスが重視されることが多く、野村自身もそのような文脈において評価されていた。しかし自身の発言を辿ると、ワークショップとポスト・ワークショップという区分などから、プロセスと結果を切り分けて両方を取ることを重視する考え方が見出させた。一方で、だじゃれ音楽の作曲や演奏の流れを細かく見ていくと、こ

のようなプロセスと結果の切り分けや専門家と非専門家の分業が明瞭になされているわけではないことが分かった。野村のふるまいにおける「無茶ぶり」からは、直前まで演奏の要素を決めないことで偶然性を呼び込みつつ、それによって呼び込まれた音やふるまいを野村がその場で逡巡しながらも判断する、すなわち「偶然性を引き受ける」ことで、結果を通じてプロセスがより生かされ、プロセスを通じて結果がより豊かになる関係が実現していることが明らかになった。

第3章では、本事例に中心的な参加者である市民音楽団体「だじゃれ音楽研究会」に焦点を当て、そこにおける個と集団の関係を、逸脱という観点から明らかにした。だじゃれ音楽研究会においては、メンバーシップが曖昧であったり、唐突な出席や欠席が頻繁にあったり、会話が脱線し続けたり、いつの間にか即興演奏が始まっていたりと、集団や企画の趣旨よりもそこから逸脱するような個人のふるまいが優先される「だじゃれの逸脱」が志向されており、このような特徴は社会的に良いとされる価値基準から逸脱する「駄」なものを価値化する「だじゃれ」の性質と共鳴しあっていた。メンバーごとに異なる性向や参加の方法を見ていくと、このような逸脱は、各々の個人的な経験や身体性に根ざした非意図的かつ必然的なものでありながら、野村や熟練メンバーはそれを促すために自らが意図的に逸脱するようにふるまっており、両者は集団からの逸脱が集団的に価値化されているという状況を矛盾なく認識しているように思われた。子供を対象にしたワークショップの分析からは、非意図的か意図的かを問わず、逸脱的なふるまいを拾い上げたり、それを受けて困惑しながら試行錯誤したりすることで、逸脱が連鎖していき、音楽の創造へと繋げられるさまが明らかになった。ここにおいて、個に基づく逸脱は、それを促す集団的な熟練によって可能になっている一方、集団的な音楽づくりを制約するものでもあり、これを受けて試行錯誤を重ねることで、逸脱を促すふるまいの集団的な熟練が強化されていた。このような個と集団の循環的かつ両義的な関係こそが、個の集団からの逸脱を集団的に志向する、すなわち「逸脱を共有する」という一見矛盾した状況を成り立たせていた。

第4章では、本事例の主催の一つである足立区の文化政策に焦点を当て、そこにおける現場の創造性とアカウンタビリティの関係、つながりという観点から明らかにした。〈音まち千住の縁〉における社会関係資本としての「縁」というコンセプト、あるいは〈千住だじゃれ音楽祭〉における「だじゃれ」というコンセプトは、いずれも音楽を介して人と人との「つながり」をつくるという期待が込められたものであった。一方で、だじゃれ音楽によってつくられる「だじゃれの関係」は、行政的なアカウンタビリティを担保する視点と衝突する「よく分からない」ものとして扱われてもいた。このような衝突は、野村やだじゃれ音楽研究会、事務局が企画の位置づけを読み替えることによって、現場レベルで調整されていた。一方、より「つながり」の質が問われる局面になると、野村とだじゃれ音楽研究会が志向する「だじゃれの関係」と行政が期待する「縁」は、より複雑な関係をとっていた。前者は、状況に応じて一時的に、あるいは時空間を隔てて接続する可能性を持つ、飛躍を伴った関係であった一方、後者は継続的に保たれ蓄積される社会関係資本として扱われていた。中高生を対象とした音楽ワークショップでは、「縁」に基づく評価は「だじゃれの関係」を接続することもあれば、切断することもあった一方、「だじゃれの関係」はこのような「縁」に基づく切断を飛び越えてより遠くに発現することもあった。また、企画のオンライン化の事例からは、担当行政職員が「縁」と「だじゃれの関係」の間で葛藤しながらも、現場の事務局スタッフとの協働によって、後者を前者へとつなげる方法を模索していたことが分かった。ここにおいて、現場の創造性としての「だじゃれの関係」はアカウンタビリティとしての「縁」による抑圧をその飛躍のための足がかりとし、「縁」は「だじゃれの関係」によってより拡張した概念として捉え直されていた。そしてそれは、音楽によるつながりを、基本的には一時的なものでありながら、継続的に蓄積される潜在性をはらむものとしても捉える、「つながりを期待する」という考え方によって成り立っていた。

終章では、これらの章における共通点を改めて整理し、本研究及び〈千住だじゃれ音楽祭〉の理論的・歴史的・実践的な意義を明らかにした。理論的には、本論文において見られた作曲家におけるプロセスと結果、アマチュアにおける個と集団、文化政策における創造性とアカウンタビリティの関係が、アドルノが論じた「支配する主体が支配される対象によって制約されることで起こる創造」を達成しているものであることを示した。歴史的には、前衛音楽・実験音楽・コミュニティ音楽において見られた特定のアクターとの関わりを強めたり断ったりすることで実践が硬直化していく問題を、つねにそれに直面しながらも乗り越える契機をはらんでいることを示した。実践的には、ここから得られた洞察、すなわち、異なる意向を持つアクターが協働関

係を粘り強く続けることによって、互いの異なる立場を理解しようとし続けること、その一方で、互いの予想外のふるまいを自らの理解の枠に押し込めることなくその都度真剣に受け止め続けること、このように互いが向かい合って試行錯誤を続けていくことで、互いが新たに出会い続け、それによって自らが変化することをも厭わないことが、「駄」、「無茶ぶり」、「飛躍」というだじゃれ音楽の特性と、各アクターの長年の協働関係によってはじめて成り立っている一方で、他の実践においても応用が可能であることを示した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、筆者が2012年から約10年間参画し続けた、音楽家・野村誠による「千住だじゃれ音楽祭」のフィールドワークに基づくエスノグラフィーであり、同時に当該事業および野村誠を現代音楽史の中に位置付ける音楽史的試みでもある。さらに、参加型音楽事業の歴史を概観し、野村誠の「だじゃれ音楽」の特性を分析する理論研究の側面も併せ持つ、複合的視点が織りなす意欲的な研究である。

審査委員会では、①これまで日本では体系だった紹介がなされてこなかったイギリスの前衛音楽、実験音楽、コミュニティ音楽などの文脈を整理し、野村誠の「千住だじゃれ音楽祭」をこうした先行事例と比較しつつその差異を明らかにし、音楽史を超えたこの試みの革新性を明示することに成功しており、かつ、「音楽」という領域の再定義を図った点、②長年の参与観察に基づく現場描写が細部にわたって目配りが利き、現場内部のさまざまなユニークな特徴が外部の者にも伝わる記述となっており、10年に及ぶ活動の詳細な記録として貴重な資料となりうる点、③その音楽的な革新性を維持するために、プログラムの運営上、運営者・参加者ともに独自の工夫を生み出している点や、主催者である地域行政との軋轢から「逸脱」する行政との共犯関係などを、理論的に明確なかたちで分析した優れたアートマネジメント研究である点、などが高く評価された。

一方で、本論部の課題としては、①非常に広範囲の理論的な資源を活用しているため、理論間の咀嚼や調整が不十分な点がみられること、特にアドルノの「主体」に関する理論の有効性や実践への応用の可能性が十分な説得力があるのかどうかの疑問がある、②筆者自身がアートマネージャーとして現場にかかわり、作曲家・市民・行政の間でさまざまな交渉や仲介をおこなっていたはずであるが、そうした事項に関する記述がないため、三者の関係性の維持・発展の様子が不明瞭であることなど、いくつかの指摘がなされた。

しかし、そうした課題も本論文の総合的な価値を貶めるものではないと判断され、充実した内容の優れた博士論文として、極めて優秀な成績を付与し学位授与が認められた。